



長州萩藩旧家の蔵書

～萩図書館所蔵資料より～



明治時代に長州萩藩旧家から萩図書館へ寄贈された和書の一部を展示しています。寄贈者の紹介と併せてご覧ください。QR コードのある資料は、デジタル化されたものを読むことができます。貴重な資料をお手元でお楽しみください。

【展 示】

益 田 家		寄贈者：益田 精祥
<p>益田家は長州萩藩の永代家老を務めた。益田右衛門介親施は、禁門の変で責任を取って切腹した三家老の一人。その長男で寄贈者の益田精祥は、明治になって華族に列せられて男爵となり、大正6年8月に56歳で逝去した。書籍は明治34年1月に阿武郡立萩図書館が創立された際、開館当日と同年7月の二度に渡り納入されている。「須佐文庫」・「須佐笠松文庫」・「育英館蔵書」・「長門国阿武郡須佐村笠松益田氏蔵書」等の蔵書印が捺してある。</p>		
<p>『和蘭字彙』 <small>おらんごじい</small> 桂川 甫周 著 <small>かつらがわ ほうしゅう</small> 安政2年(1855)刊行 13冊</p> 	<p>幕末に刊行された洋学時代最大の蘭和辞典。 <small>かつらがわほうしゅう</small> 桂川甫周が「ドーフハルマ(長崎ハルマ、ズーフ・ハルマ)」を校訂し刊行したもの。見出し語をオランダ語で説明しさらに和訳するいわゆる双解式となっているほか、多数の合成語・熟語・例文を含んでいる。見出し語の実数は約5万語である。 参考資料：『国史大辞典』</p>	
<p>『事斯語』 <small>じしご</small> 毛利 齋広 著 <small>なりとあ</small> 林 述齋 序 山県 太華 跋 <small>じゆつさい やまがな たいか</small> 天保13年(1842)刊行 全3冊</p>	<p>長州萩藩第十二代藩主毛利齋広(1814～1836)の遺著。 <small>なりとあ</small> 齋広は聡明で幼少より学問を好み将来を嘱望された。天保7年12月藩主となったが、僅か20日余りで22歳の若さで死去した。 内容は読書や講義の余暇に会得した先哲の名言・教訓等を抄録したもの。2巻と附録1巻より成る。 参考資料：『長周叢書 下』</p>	
久 保 家		寄贈者：久保幾次郎
<p>久保家は、長州萩藩大組士であった。寄贈者の久保幾次郎の父・五郎左衛門は、玉木文之進がはじめた松下村塾の名を受け継ぎ、吉田松陰に譲った。幾次郎は、農商務省鉱山局に勤めたが早く退官し、大正9年に逝去した。書籍は杉・玉木両家と同じ明治35年3月18日に萩図書館に寄贈されているので、杉家か玉木家に預けてあったと思われる。「久保久清文櫃之章」・「中島蔵書」・「重陽園」等の蔵書印が捺してある。</p>		
<p>『臣行解』 <small>しんこうかい</small> 山県 太華 著 <small>やまがな たいか</small> 文化10年(1813)刊行 全1冊</p>	<p>漢の劉向撰の『説苑』20篇のうちの臣術篇に拠り、これに唐の呉兢撰の『貞観政要』にある事蹟を引用して、人民の道を記したもの。著者は長州萩藩の儒官で、天保6年(1835)明倫館学頭兼祭酒となり、学風を一変して従来の徂徠学から朱子学へと改めた。 参考資料：『近世藩校に於ける出版書の研究』『日本大百科全書(ニッポニカ)』</p>	

玉 木 家

寄贈者：玉木文之進[正之]

玉木家は長州萩藩大組士であった。寄贈者の文之進(正之)は玉木家の養子正誼^{まさよし}の遺児である。杉百合之助の弟で、甥の吉田松陰を教育した玉木文之進とは同姓同名の別人である。書籍は杉家と同じ明治 35 年 3 月 18 日に萩図書館に寄贈されているので、杉民治により一緒に納入されたものと思われる。「玉木蔵書」・「神亀文庫」等の蔵書印が捺してあるものがある。

『七書(七書正文)』
寛政 7 年(1795)刊行 2 冊



11 世紀の初め、北宋の元豊年間(1078-1085)に代表的兵法書 7 種を選んで「七書」と称し、軍事学の基本的經典と定められたのに始まる。権謀術数や野戦攻城の戦略戦術の詳細はもとより、戦争の本質や国政とのかかわりといった根本問題から、財政や兵制、軍紀と賞罰、將軍の心得、士気の高揚、兵士の訓練、食糧の確保などの諸問題に及ぶまで、軍事に関するすべてが説き尽くされている。
参考資料：『国史大辞典』

杉 家

寄贈者：杉 民治

杉家は長州萩藩無給通であった。寄贈者の杉民治は、吉田松陰の兄である。通称は始め梅太郎といったが、民政に尽くした功により藩主・毛利敬親より民治の名を賜った。廃藩後松下村塾を存続し、明治 43 年 83 歳で逝去した。書籍は主に明治 35 年 3 月 18 日に萩図書館に寄贈されている。同年 11 月 24 日に寄贈されたものもある。「松下杉圖書章」・「松下村塾」等の蔵書印が捺してある。

『留魂録 (複製)』
吉田 松陰 著
刊行年不明 全 1 巻



『留魂録』は、江戸獄において、刑死の前日である安政 6 年(1859)10 月 26 日の黄昏に書かれたもので、吉田松陰の知友や門下生等への遺言書ともいえるべきものである。これにより幕吏の取り調べの経過や獄中志士の消息が明らかになるとともに、松陰の死に直面しての静かな心境もうかがわれ、後起の同志に対する痛切な遺託も知ることができる。
参考資料：『吉田松陰全集 第 6 巻』

『点註唐宋八家文読本』
川上 広樹 纂評 沈 徳潜 編
明治 11 年(1878)刊行 14 冊



清の沈徳潜^{しんとくせん}が唐宋八大家の古文の傑作を撰び、初学の人たちの教材とした『唐宋八家文読本』の注釈書。『唐宋八家文読本』は、江戸時代に日本に伝えられ、明治以後盛んに読まれた。古文に習熟するための漢作文のお手本として明治時代に数多くの復刻本や注釈書が出版されている。
参考資料：『新釈漢文大系 第 121 巻 漢籍解題事典』

馬島家

寄贈者：馬島春三

馬島家は、代々長州萩藩に仕える眼科専門医であった。馬島甫仙は、吉田松陰の愛弟子であり、松陰の死後松下村塾の指導者となった。寄贈者の馬島春三は甫仙の甥である。甫仙が28歳で急逝したので、妹ツルの婿忠四郎が家を継いだ。春三は忠四郎の三男。書籍は大正15年2月4日に萩図書館に寄贈されている。「馬島氏蔵書印」・「馬島光昭」・「櫻山愷史」・「大森蔵書」・「長門大森図書」・「口磨園蔵書」等の蔵書印が捺してある。

『孫子評註』

吉田松陰 著

文久3年(1863)刊行 2冊



文久3年に松下村塾より出版された木版本。門人の中谷正亮・久保清太郎が校正した。馬島甫仙旧蔵の板本には朱筆で本文に書き入れがあり、テキストとしても使われたものではないかと考えられる。

長州萩藩以外の人々へも広がり、この一冊の本が長州萩藩と他藩の人々を結び付けていた。この本を皮切りに、松陰の著書の出版が始まった。

参考資料：『マツノ通信3』

赤川家

寄贈者：赤川こうすけ懋介

赤川家は代々長州萩藩に仕える本道医（内科）であった。第七代玄悦は幕末に藩の医学館好生館を設立、西洋医学の普及につとめた。寄贈者の赤川こうすけ懋介は玄悦の長男で、通称を敬三、はいさん医学を学んだが幕末は志士として活躍した。維新後は福岡県大書記官、秋田県令等を歴任した。書籍は明治40年8月15日に萩図書館に寄贈されているので、おそらく帰萩して江向にあった家を整理したものと思われる。山脇東洋の『蔵志』や緒方洪庵の『病学通論』など江戸時代の代表的な医学書も含まれる。「赤川亭蔵」・「赤川蔵書」・「旭亭」・「無芳園」等の蔵書印が1個または2個捺してある。

『瘍科秘録』

本間ほんま棗軒そうげん 著

弘化4年(1847)刊行 10巻12冊

水戸藩医・本間ほんま棗軒そうげん(1804~1872)が、華岡流外科の奥秘を公開したものである。痔疾・乳癌・癰などの外科疾患、疥癬などの皮膚疾患、抜歯術なども含まれる。「食兎中毒」の記載は野兎病の世界で最も古い記録とされる。第10巻には人間に生えた尾の治療記録がある。参考資料：『日本大百科全書』